

第1篇 資本の諸変態とそれらの循環—第2章 生産資本の循環

第3節 貨幣蓄積

拡大再生産の場合、資本が生む剰余価値は単純再生産の場合のように全部消費されない。「現実には」一部分が所得として消費され、一部分は資本として蓄積される。

122 頁「最小限の大きさを規定する」

○資本蓄積に向けられる剰余価値 g は、直ちに資本化されるわけではない。剰余価値 g が拡大再生産、再投資されるためには、それに必要な最低の資本量に達している必要がある。

○「最低の資本量に達している必要がある」とは、 g が最初の事業の拡張に用いられるとして、その際の生産手段は、一定の量的相互関係、比例的な大きさを持つ必要がある。

123 頁1「たとえば、……」

紡績業で例示。最低必要な資本量は事業の種類、資本の構成により異なる。この場合、「紡錘新調一個あたり1ポンド」と例示し「かような事業拡張を遂行するためには、剰余価値 g が、かなりの額になっていなければならない」

123 頁6「資本の循環が何回も繰返されねばならない」

○貨幣資本 G に向けられる剰余価値 g が、資本の必要最低限量に達していない場合には、資本の循環の繰返しにより蓄積されねばならない。

○剰余価値は貨幣形態で蓄積され、それが一定量に達してはじめて現実の追加的貨幣資本として機能する。

123 頁5「それまでのあいだは、」

○この剰余価値 g が貨幣として循環に加わることをせず、引上げられ、退蔵貨幣の形態に一時的に留まる。その間、資本として機能せず、ひとつの貨幣額に留まることとなる。

○しかし、商品生産に共通な貨幣退蔵がその自己目的ではない。それは資本の蓄積に一時的に随伴する準備過程である。従って、この退蔵貨幣は同時に潜在的貨幣資本の規定を受ける。

第4節 予備金

125 頁 8 「いま考察された形態では、…」

剰余価値が存在する形態である退蔵貨幣は、貨幣蓄積基金であり、資本蓄積にもなう一時的な、しかし必然的な形態であることをこれまで考察してきた。

125 頁 10 「しかし、…」

○しかしこの蓄積基金は、特殊な副次的な役割をも果たしうる。すなわち、資本の循環過程、生産資本および生産過程を採ることなしに、資本主義的再生産が拡大されることなしに、資本の循環過程に入ることができる。

○ $W' - G'$ なる過程（剰余価値を含む新たな生産物、商品資本と増殖された貨幣資本の等価交換に基づく流過程）が正常の限度以上に延長され、したがって商品資本がその貨幣形態への転化を異常に阻止されるならば、

○ $W' - G'$ の過程が正常に行われても、貨幣資本がそれに換えられるべき生産手段の価格が循環の開始当初の水準以上に騰貴（生産手段の価格騰貴、変動によりこれまで通りの生産が出来ない場合）しているならば、

○貨幣蓄積基金は循環の攪乱を調整するための予備金として役立つ。

126 頁 9 「これに反して、」

単純再生産で述べた「予備貨幣資本」は循環している資本価値の一部分である。これに対し、予備金は機能しつつある貨幣資本の一部分ではなく、未だに能動的な資本に転化されていない、剰余価値の一部分である。